

「少年」をめぐるイマジネーション

―カリスマとしての梅若丸と親子というモチーフ

同志社大学大学院教授 佐伯 順子

日本中世の稚児物語に描かれる少年たちの命は、ひとしなみにはかない。『秋夜長物語』の稚児・梅若は、桜の花とみまがう絶世の美少年であるが、天狗にさらわれたうえ、最後には瀬田の唐橋から身を投げて若い命を散らす。

他の稚児物語でも、稚児は病死等で夭折するが、それは必ずしも悲劇を意味しない。少年たちの容姿は決まって、桜の散りやすさと重ねられ、はかないからこそ極上の美であると賛美される。さらには、少年こそが観音の化身であると、宗教的な崇拜の対象にまで高められるからである。

美人薄命^{メロウ}という言い回しがあるように、美人の死を悲劇化する舞台芸術は、オペラ『椿姫』(ヴェルディ)や『ラ・ボエーム』(プッチーニ)のように西洋にも例があるが、日本の文学や芸能においては、少年、特に美少年の死が、読者や観客のあわれを誘い、この世の無常を悟らせるモチーフとして好まれた。それは、漫画『トーマの心臓』(萩尾望都)や『風と木の詩』(竹宮恵子)にもみられる、日本の文化史上、驚くほど連綿と受け継がれているモチーフなのである。

『隅田川』の梅若丸の死は、能舞台で実際に演じられることはないものの、「この人習はぬ旅の疲れにや、路次より以つての外に違例し^{イレイ}」との一節は、痛ましくも夭折

する繊細な少年像を、観客に想起させる。謡曲『隅田川』

で、梅若丸が実際に登場するのは終幕近くであり、しかもすでにこの世にはいない亡霊の姿である。演出によっては姿をみせず、声しか登場しない場合もある。また、詞章に梅若丸の容姿についての詳しい描写もないので、ジャーニズ・アイドルのようなイケメンの少年(？)だったかどうかは定かではない。

だが、「こぼれか、りたる鬢のはつれより、にほやかにほのかなる顔ばせ、露を含める花の曙、風に従へる柳の夕景色」(『鳥部山物語』)と、日本の中世文学において、少年の美貌は極めて耽美的に描写されるのが、お約束であり、世阿弥その人の稚児としての側面(松岡心平『宴の身体』)も思っておせば、『隅田川』の能もまた、日本文化史における「少年」という存在のカリスマ性に立脚していることは疑いなからう。

少年の死を、表向きは悲劇として描きつつも、そのことが少年という存在の非現実性、幻想的カリスマ性を示唆する――つまり、『隅田川』の表層上の主人公が、子を探す母親であるとすれば、根底においてこの曲を支える核となっている影の主人公は梅若丸であり、それは、「少年」という存在に日本人が連綿と託してきた宗教的、美的

カリスマ性を暗示する。

後に「隅田川もの」として展開する一連の芸能のなかで、同じ梅若伝説に基づく歌舞伎では、少年の夭折美をより生々しく演出するが、能のストイックな表現はそれをしない。しかし、業平の東下りの例をひきながら、「わらはも東^{アズ}に思ひ子の、行方を問ふは同じ心の、妻を忍び子を尋ぬるも、思ひは同じ恋路なれば」¹と口^クにされる母の思いは、息子への愛を妻への恋と同一視する、あやういほど熱い少年への思い入れを吐露している。

「少年」という存在が日本の文化史において、中世稚児物語から現代のBL漫画、さらには芸能界のアイドル文化に至るまで、男女を問わぬファンの憧憬の的であり続けてきたことを思えば、梅若丸への情愛が「恋」と表現されるのも、少年をめぐる日本的な心性の一端とみることができよう。

一方、母と息子の間のエロスのとさえみえる愛情は、谷崎潤一郎や泉鏡花など、近代文学にも好まれたモチーフであり、特に『隅田川』の母子は、「母一人に添ひ奉りて候を」²と、いわゆるシングル・マザーの家族であるからお互いを支えにする思いもひとしおだったのであろう。

『隅田川』は、ブリテンのオペラ『カリーユー・リヴァー』に翻案されたことでも知られるが、オペラという芸能は確かに、楽劇という点では能との形式的共通性があるものの、親子の絆よりも、恋愛や夫婦といった男女の横の絆に焦点が当てられがちである。『さまよえるオランダ人』

(ワグナー)や『ワルクユール』(同)の父と娘、『魔笛』(モーツァルト)の母と娘のように、父子関係や母子関係が描きこまれる例も少なくはないが、愛着を描くというよりも価値観の対立や葛藤が前面に出る。『リゴレット』(ヴェルディ)の主人公(父)の娘への愛情は深いが、娘に対して家父長的な束縛もみせる。

逆に日本の芸能では、親から子への愛着、特に「葛の葉子別れ」(『蘆屋道満大内鑑』)のように、母から息子への愛情表現が好まれる傾向にあり、都からはるばる息子を求めて東下りをするシテの姿は、そうした文化的嗜好の表現でもある。そういえば、探される子供は息子が多いが、娘を探してもよいのではないかと、ふと思う。

能楽師であった祖母が、神戸の上田能楽堂で『隅田川』を演じた際、まだ子供であった私の心にも、亡くなった息子をしのぶ母の思いは痛切に刻まれた。その娘であった私の母は、素人としての稽古で謡と仕舞をたしなんでいたが、自宅で私によく冗談まじりに、「母にてましますかと」³って言って「ごらん」と、終幕の子方の台詞を言わせたが、今思えば、子供との絆を確かめたい親心でもあったのだろうか――。

付記：謡の詞章は金剛流謡本『隅田川』に従い、句読点を適宜補った。